





てやってくる天神講の傘踊りや獅子舞だった。派手な禪と提灯袴姿の踊り手たちには友達も混じっていて、僕達は一緒にお祭りについて歩いた。夜は大川の船渡御があり、遅くまで賑わった。

その夜、僕はさぶちゃんの家に行った。昼間、新しい漫画雑誌を借りる約束をしたからである。僕はいつものように裏の庭から入って、さぶちゃんの部屋の下に行ったが、部屋も家も真っ暗で誰も居る気配がなかった。いつもは開けられている庭に面した縁側の雨戸も閉まっている。諦めて帰ろうとしたその時である。突然、さぶちゃんの部屋の窓が開いて、誰かが顔を出した。

「何や、洪ちゃんかいな。びっくりした」

驚いたことに、それはメケメケだった。メケメケは、天神祭りに出かけたさぶちゃん達にかわって、留守番をしているのだと云った。それから「ちょっと、待って」と言うと、縁側の雨戸を開けて庭に降りてきた。そして、はしゃいだ声で「あ、花火や！」と、僕の後ろの夜空を指差して言った。僕は驚いて振り返ったが、そこには黒々とした庭木の茂みが不気味に蹲っているだけである。

「花火なんか、見えるかいな」と僕が云うと、メケメケはじっと僕の顔を覗き込んで、「あんたはまだ小さいから、何にも分からへんのや」と、不思議なことを言った。

その時、僕はメケメケが口紅をしていることに気がついた。僕がそう言うと「洪ちゃん、誰にも言うたらあかんで、うち、初めて口紅したんや、そやから誰にも言うたらあかんで」と、メケメケが耳元でささやいた。

その時、僕は気が付いた。ふだんは閉めてあるさぶちゃんの部屋の横の小さな窓が開いている。その窓はメケメケなら忍びこめないことはない。

「洪ちゃん、怖いんか」

「怖いことなんかない、ここの庭はよう知ってるから怖いことなんかないで」

「違う、うちが怖いんか、うちはメケメケやで、蛇の神さんやで」

そう云うメケメケの顔は、闇の中に赤く塗られた唇だけが、まるで怪しい生き物のように動いている。

「洪ちゃん、三輪山の話覚えてるか、三輪山の神さんはな『大物主』という名前の蛇神さんや。昔、他所から王様が三輪山にやってきて、見たこともない宮殿を建てて、町を造って、沢山の人を集めて、それから他所もんの神さんを祀ったんや。そしたら三輪山の神さんが怒って病気を流行らしたり、災いを起こしたりしたんや。そやから、他所もんは大人しくしとかなアカンて、お祖母ちゃんが云うてはった」

「メケメケは他所もんなんか？、さぶちゃんのお姉さんと違うんか？」

「洪ちゃん、誰にも言うたらアカンで。あんたにはまだ難しいけど、うちは本当はこの家の娘なんや、そやからここの家のもん、みんなうちのものにしたるねん」

僕たちの町は、大阪北の天満と呼ばれる所で、天満宮を中心としたこのあたりは、東は与力町、同心町の地名が今に残る役人の町、西は旅籠町、伊勢町、地下町、綿屋町、樽屋町、魚屋町、源蔵町、絹笠町などの下町が続いていた。天満橋、天神橋、難波橋と続く大川岸は、「天満の市」が栄えた所で菅原町の食品問屋街には喧騒の名残が残っていた。昭和30年代の半ば、やがて高速道路で埋め尽くされる大阪の堀川には



まだ水が流れ、国道には市電が走り、セミの声に混って氷屋の音と、はったい粉売りの「麦茶、はったい粉！」の音が町に流れていた。

その年の盆踊りは、僕らの遊んでいるハラッパであった。いつもはお地蔵さんの前の道に小さなヤグラを組んで盆踊りをしたが、その道がコンクリートで舗装されたこともあって、警察の許可がおり

なかったそうである。

盆踊りの日は、小さな子供と大人たちはみんなゆかたを着ていたが、僕たちぐらいの年の子は、何人かの女の子を除いてゆかたを着ている子はいなかった。けれどもその何人かのゆかたの女の子の中にメケメケも入っていた。僕たちには、ゆかたを着て楽しそうに踊るメケメケは、まるで大人の女の人のように見えた。

そんなメケメケが、盆踊りにあきて空き地の暗がりではついでに花火をやっていた僕とさぶちゃんのところにやってきたのは、盆踊りも終りに近くなった頃だ。

「何や、線香花火かいな、うちにもやらして」

「メケメケは踊るの、うまいなあ。何や大人の女の人の人みたいや」

「線香花火で、流れ星みたいやな。うちとこの田舎はな、この花火みたいに幾つも幾つも流れ星が流れるんや。」

「流れ星は何処に落ちるんや」

「お墓や、私の家の近くには、山みたいに大きなお墓があって、流れ星はみんなそこに落ちるんや」

「メケメケの田舎で奈良の三輪山の近くやったな」

「その大きなお墓はな、大昔の邪馬台国の女王のお墓なんや」

「邪馬台国やったら知ってる。図書館の本で読んだことがある。邪馬台国の女王は卑弥呼や。卑弥呼は神さんの使いなんや」

「ふーん、もしかしたらメケメケは卑弥呼なんかも知れへんなあ」

気がつくともう盆踊りは終わっていて、大人の人が一つ一つ提灯の明かりを落としているのが見えた。誰かが「盆踊りはもう終わりやさかい、子供は早よ帰りや」と僕達に声をかけた。

「そのろうそく、お地蔵さんのところから持ってきたのと違うの。お地蔵さんの火はひとつ火やから、大事にせなあかなくて、お祖母ちゃんが云うてはったで」

大人の人が立ち去ったのを見て、メケメケが言った。

「ひとつ火　てなんや」

「ひとつ火はな、お盆の時にこっちのほうへ来てた人が、あっちに帰りはる時に、迷わんようにひとつだけ付けとく火のことや。ひとつ火を勝手に持ってきたりしたら、その人らが迷うてしもて、ちゃんと帰られへんようになってしまふんよ」

「メケメケは、難しいこと知ってるなあ」

「そやかて、私は日陰もんやから。日陰もんはしっかり勉強して他の人より賢いならなあかんねん。そうせんと、生きていかれへんて、うちのお母さんが言うてたんや」

「えっ？、メケメケのお母さんは生きてはんのか？、奈良の三輪山に居たはるんか」

「当たり前や、これ見てみ。この着物お母さんが縫うてくれたんやで」

「それ、俺とこのお母さんが、昨日押入れから出してた着物やんか」



「違う。これは私のお母さんが縫うて持ってきてくれたんや。お盆の時に着るようにて、お祖母ちゃんに預けといてくれたんや。あんたのお母さんなんか関係あらへん」

それからメケメケは急に泣き出すと、僕に云った。

「洪ちゃん、あんた言うたやろ、天神祭りの夜のこと、みんなに言うたやろ。うちが口紅したこと、みんなに言うたやろ」

「そんなこと、誰にも言うかいな」

「みんな、うちのことバカにしてるんや。日陰もんやおもて、バカにしてるんや。うちはもうあんたらとは遊ばへん。夏休みが終わったらお母さんここに帰るんや。そやからな、もうあんたらとは遊ばへん」

そう言いと、メケメケは突然立ち上がって走り去った。夜の町にメケメケの下駄の音が、乾いた音を立てて遠ざかっていった。

それは、長い夏休みも終わりに近くなった日の夕方だった。僕が一人で空き地に行くと、メケメケがやってきて、僕たちは二人で野球を始めた。メケメケがボールを打って僕がそのボールを受ける。メケメケが遠くまでボールを飛ばすから、僕は走り回ってボールを追いかけなければならなかった。そのうちに草むらにボールが飛び込んで分からなくなり、僕たちは二人でボールを探した。

あたりが薄暗くなって、ボールを探すのにくたびれてきたころ、誰かがメケメケを呼ぶ声が聞こえた。するとメケメケは、スカートのポケットからグリコのアーモンドチョコレート箱を取り出して僕に握らせると、ごめんねと言った。それから「お母さんが迎えにきたから、私もう帰る」といって、声のほうに走っていった。

ぼくは驚いて、夕暮れの中に消えていくメケメケの後ろ姿をみていた。

やがて曲がり角のところまで行ったメケメケは、大きな体で振り返って、何か白いものをカ一杯投げた。それは大きく弧を描いた後、驚いて差し出した僕のグローブの中に入った。それは、さっきまで二人で探していたはずの僕のボールだった。

暫くして、僕達はまた学校に行き出したが、もうメケメケに会うことはなかった。

---

最近、NHK朝ドラの「ゲゲゲの女房」を見ています。貧乏のドン底から一夜で売れっ子漫画家になるという絵に描いたようなサクセスストーリーと、「そげですええ」の主人公の素朴な感じ、それに昭和の風景が懐かしさを運んでくれますね。

実は「ゲゲゲの鬼太郎」はあまり見たことはないんですが、個性的なキャラクターは何となく覚えています。「鬼太郎」はもちろん主人公で、「目玉親父」、「ねずみ男」、「ねこ娘」、「児なきじじい」、「砂かけばあ」、「一反もめん」、「ぬりかべ」、「ぬらりひょん」、「朱の盤」、これらは、テレビアニメに登場した妖怪たちの名前ですが、民話的な雰囲気です。なぜ「もめん」や「ぬりかべ」が妖怪になるのか分からないけど、昔からある物に命が宿るのは、悪いことではないような気がします。

今回は夏休みということで、50年以上も前の風景をお話に書いてみました。うーん、まあ、歴史とあまり関係ないんですが、どうでしょう。